「地方創生と伝統行事」番外編

―『枕草子』の田植えと歌―（前編）

上席専門職　平沼　浩

目　次

１．はじめに
２．作品の特徴、執筆目的、読み解きのカギ
３．「香炉峰の雪」を例に
（以下、後編）
４．『枕草子』の田植えと歌
５．歌う人々
６．まとめ

１．はじめに

本誌連載中の「地方創生と伝統行事～土地の記憶を行動で共有する～」は、平成二十八（2016）年十月号掲載の『壬生の花田植え』（広島県山県郡北広島町）からスタートした。地方創生を考えるにあたり、行政主体ではない住民主体の伝統行事から取組みのヒントを導こうという企画である。しかし、今年は長引くコロナ禍の影響で伝統行事の開催そのものが困難な状況が続いている。

そこで、今回は趣を変え、「地方創生と伝統行事」番外編として、初回の『壬生の花田植え』に関連して、『枕草子』に描かれた約千年前の田植えの姿を考察してみたい。

『壬生の花田植え』は、装飾された飾り牛と人が水田を整え、サンバイと呼ばれる男性指揮者が高らかに歌う親歌と田楽団のお囃子に合わせて、揃いの衣装に身を包んだ早乙女と呼ばれる女性たちが親歌に返す子歌を唱和しながら田植えを行う伝統行事である。中世の田植えの姿を今日に伝える貴重な国の重要無形民俗文化財であり、ユネスコ無形文化遺産にも登録されている。

この『壬生の花田植え』に出会って以来、筆者が謎の存在として意識してきたのが、『枕草子』の「賀茂へ詣る道に」に描かれた田植えと歌だった。

十一世紀初頭の平安時代に書かれた『枕草子』は、当時の定番である「物語」「日記」「和歌集」といった形式にとらわれない自由な散

写真は「壬生の花田植え」。
左は、飾り牛による代掻き。上は、花田植え。

文のスタイルをとっている。独自の感性で四季の美しさを表現した「春はあけぼの」で始まる初段は広く知られ、作者である清少納言が仕えた中宮定子（一条天皇の后）の後宮の機知溢れる雰囲気を伝える「香炉峰の雪」のエピソードも教科書等で知られる。

しかし、清少納言が描写した田植え等の農業に関する記述は、『枕草子』を通読しなければ知り得ないし、通読して該当箇所を知り得たとしても、注釈本や研究書の解説は、王朝文化の解説に比べて薄いように思われる。まして、なぜ清少納言は田植え等の様子を描いたのかという疑問には答えてくれていない。

本稿では、清少納言が約千年前の田植えの様子をどのように描いたか、そしてなぜ田植え等の農作業を『枕草子』の題材に取り上げたのかについて考察する。主なキーワードは「古今集」、「横串を入れる」、「ホトトギス」である。結論を一部先に述べてしまえば、清少納言が描写した田植えも、『壬生の花田植え』と同様、単なる生産活動ではなく、歌を伴う集団の行事であり豊かな生活文化だった。そして、清少納言はただ徒然に農業の姿を描写したのではなく、積極的な意図をもって題材に取り上げたと考える。

本題に入る前に、作品の特徴や執筆目的、読み解きの手掛かりに触れておきたい。というのも、『枕草子』は予めシャッフルされたトランプのような構造をしているからである。

２．作品の特徴、執筆目的、読み解きのカギ

⑴　『枕草子』の特徴

①　どこからでも、気軽に

国文学者の永井和子は、自身が現代語訳を行った『枕草子』（新編日本古典文学全集）の序文で、次のように述べている。

「『枕草子』は、注釈や現代語訳を気にせずに、本文を手にして、どこからでも、気軽に、自分の目で読むのが一番楽しい。」「『枕草子』はたかが約千年前の日本語であるから、基本的に本文をおそれることはない。」

その「どこからでも、気軽に」楽しめる例をあげてみたい。以下、章段番号・本文・現代語訳とも断りの無い限り、松尾聰・永井和子『枕草子』（新編日本古典文学全集）による。

第九十一段「ねたきもの」

ねたきもの　人のもとにこれよりやるも、人の返事も、書きてやりつる後、文字一つ二つ思ひなほしたる。とみの物縫ふに、かしこう縫ひつと思ふに、針をひきぬきつれば、はやく尻を結ばざりけり。また、かへさまに縫ひたるも、ねたし。

（現代語訳）いまいましいもの　人のところにこちらから送る手紙でも、人の手紙の返事でも、書いてしまったあとで、文字の一つ、二つ考え直したの。急ぎの物を縫う時に、うまく縫ったと思うのに、針を引き抜いたところ、もともと糸のはじを結んでおかなかったのだった。また、裏表を反対に縫ってしまったのも、いまいましい。

実はこの針仕事の失敗談は序の口で、後宮に至急で大量の仕立物の依頼が来てからの大騒ぎがこれに続く。大勢の女房たちが大慌てで取り掛かるが、慌てているのもだから失敗続出、てんやわんやの騒ぎになる。

次も笑いを誘う章段。

第百二十三段「はしたなきもの」

はしたなきもの　こと人を呼ぶに、わがぞとさし出でたる。物など取らするをりはいとど。おのづから人の上などうち言ひ、そしりたるに、幼き子どもの聞き取りて、その人のあるに言い出でたる。

（現代語訳）中途半端で間の悪いもの　ほかの人を呼ぶのに、自分だと思って顔を出したの。物などを与える時には、いっそう。たまたまちょっと他人のうわさ話などして、悪口を言ったのを、幼い子供が耳にしていて、その人がいるのに、それを口に出したの。

粗忽者の失敗を明るい笑いに変えるセンスは、漫画家の長谷川町子を思わせる。平安文学研究者の山本淳子も「私は漫画の『サザエさん』が頭に浮かぶ。」と著書『枕草子のたくらみ』（2017）の中で述べている。

次は、物理現象を捉える確かな眼差し。

> **第二百十六段「月のいと明かきに」**
> 月のいと明かきに、川をわたれば、牛の歩むままに、水晶などのわれたるやうに、水の散りたるこそをかしけれ。
>
> （現代語訳）月のとても明るい夜、牛車で川を渡ると、牛が歩くのにつれて、水晶などが割れたように、水の散ったのはおもしろいものだ。

牛の蹄で飛び散る水しぶきを水晶が砕け散る様子に喩える斬新さ、液体を固体で表現する発想は、常人には思いもよらない。

このように、『枕草子』の各章段は、各々小さなテーマ性を持っており、「どこからでも、気軽に」入って行ける敷居の低さがある。

②　読者を困惑させるもの

一方で、前出の永井は、次のようにも述べている。

「いかにも晴朗の気に満ち、屈託がなく明るい。よいと思うものをよいと言って感激し、おもしろいと思ったものをおもしろいと言って笑う。この作品は読み手に対し、ほとんど何も説明しない。そこで、いささか不安になって、更に一歩進もうとするのだが、実は進もうにもその手立てがほとんどないことに改めて気づき、また困惑するのである。」（『枕草子』新編日本古典文学全集・序文より）

読者を困惑させる最大の要因は、その構成である。約三百の章段は、①「○○は」や「○○○もの」ではじまる「類聚的章段」、②ある日の事柄を記述した「日記的章段」、③内容形式とも自由な「随想的章段」の三つに分類される。これらがランダムに配置されており、専門家はこの構成を雑纂形態と呼んでいる。

「物語」ならストーリーを追うことができ、「日記」なら時間の推移を追うことができる。「和歌集」なら春夏秋冬等で分類される。ところが、『枕草子』の章段配列は、予めシャッフルされたトランプのように規則性を欠いている。たとえば、中宮定子の実父で政治的にも経済的にも後ろ盾だった関白藤原道隆にまつわる回想は、生前のものと死後のものとが、時間がループするように分散している。

（道隆・生前）

第百段「淑景舎、春宮にまゐりたまふほどの事など」、第百二十四段「関白殿、黒戸より出でさせたまふとて」、第二百六十段「関白殿、二月二十一日に、法興院の」。

（道隆・死後）

第百二十九段「故殿の御ために、月ごとの十日」、第百三十七段「殿などのおわしまさで後、世の中に事出で来」。

なお、これらを通して受ける関白道隆の印象は、権力者というよりも風流と家族を愛し、後宮の女房たちを気さくに冗談で笑わせる朗らかな好人物である。

(2)　『枕草子』の執筆目的

①　誰のために書かれたのか

『枕草子』は、清少納言が中宮定子に捧げたものというのが定説である。根拠は、巻末に作者が執筆経緯等を記した跋文にある。

跋文の該当箇所を要約すると、中宮定子が内大臣からまっさらの冊子を献上されたのが発端である。帝（一条天皇）には同様の冊子がすでに献上されており、帝は『史記』をお書きになるという。中宮定子から「これに何を書いたらいいかしら」と問われ、清少納言は「それは枕でございましょう」と提案すると、「それならば、そなたに取らせよう」と冊子を下賜されたというのである。

中宮定子と清少納言の二人が以心伝心で交

わした「枕」の暗号がどんな意味をもつのか、諸説あるが定説はないようだ。ともかくも、この作品の出発点は、このエピソードだった。

②　『古今和歌集』の向こうを張る意気込み

前出の山本は、その著書『枕草子のたくらみ』で執筆目的の真相を考察している。

山本がまず手掛かりとしたのは、能因本系と呼ばれる『枕草子』の跋文である。実は、書写により伝えられてきた『枕草子』には、いくつかの伝本系統があり、先に紹介した本文や跋文は、現代語訳や注釈本が比較的多い三巻本系を底本にしたものである。両者の相違点は次の通りである。

・三巻本も能因本も作者は清少納言である点に変わりない。
・違いは三巻本系が初期の作で、能因本系は清少納言自身による再編作という点である。このため能因本系の方が比較的情報量は多い。

ちなみに、三巻本と呼ばれる所以は三冊セットになっているからであり、能因本と呼ばれる所以は能因という僧侶が所持していたことによる。

この二系統の伝本について、前出の永井は『幻想の平安文学』(2018) において、「雑纂本二系統の優劣は定めがたく、三巻本・能因本の両系統はその特色を際立たせながら並立しているのが現況だろう。」と述べている。永井は能因本についても『枕草子』(日本古典文学全集) で現代語訳をしているので、適宜参照する。

さて、執筆経緯における三巻本と能因本の情報量の端的な差は、中宮定子の問いかけの言葉に「古今をや書かまし（わたしは古今を書こうかしら)」が追加されている点である。

「古今」すなわち『古今和歌集』は、十世紀初頭に「やまとうた」による文化復興を目指して万葉集の後継和歌集として企画され、醍醐天皇の勅命で編纂された最初の勅撰和歌集である。仔細は、献上にあたり撰者を代表して紀貫之が書いた「仮名序（かなじょ）」に詳しい。

ちなみに、『枕草子』の比較的前の方に配置されている第二十一段「清涼殿（せいりょうでん）の丑寅（うしとら）の隅（すみ）の」には、『古今和歌集』にまつわるエピソードがある。中宮定子が後宮の女房たちを集めて上の句を読み上げ、下の句を言わせて習熟度の様子を測り、また後宮を訪れた帝が出来のよろしくない女房たちに季節や作者をもとに集中レッスンをする微笑ましいエピソードである。『古今和歌集』が基本的な教養に位置づけられていた様子が窺える。

話を戻そう。中宮定子は、帝が冊子に『史記』をお書きになるという情報を踏まえて、わたしは『古今和歌集』を書こうかしらと問うた。この格式ある二作品を踏まえたうえで、清少納言は「枕」を提案し、中宮定子は「それならば」と清少納言に託した。

前出の山本は、『枕草子のたくらみ』で次のように述べている。

「能因本系統の「跋文」からは、次のことが知られる。この作品がもともと定子の下命によって作られたこと、定子が清少納言独りに創作の全権を委ねたこと、そして二人はこの新作に『史記』や『古今和歌集』の向こうを張る意気込みを抱いていたこと。下命による作品は下命者に献上するものであるから、執筆した後は、清少納言はこれを定子に献上したはずである。つまり、「跋文」に従う限り、『枕草子』とは定子に捧げられた作品であったのだ。」

『枕草子』が中宮定子のために書かれた作品とする点は定説の範囲として、追加情報の『古今和歌集』をヒントに、作品の方向性を推論するのは合理性があると思われる。

また、山本は、こうも続ける。

「春は、あけぼの。『春は？』とその象徴を問いかけられた時に、普通は誰がこう答えるだ

ろうか。春は桜。あるいは、春は鶯。春風などと答える人もいるかもしれない。いずれにせよ、多くの人は何かしら春を代表する『物』で答えるだろう。その思考法は、平安人も現代人と変わらない。この初段のように時間帯で答えるという発想はまずあるまい。その意味で、『枕草子』は最初の一文から斬新だ。」

「『古今和歌集』「仮名序」を知っていてこそ、それを革新させた機知である。『枕草子』の冒頭、まさしく『古今和歌集』にとっての「仮名序」の位置にこれを置くことで、『古今和歌集』の向こうを張った企画『枕草子』の心意気を、清少納言は示したのだ。」

つまり、『枕草子』の初段は、『古今和歌集』「仮名序」へのオマージュであると同時に革新であり、『枕草子』は『古今和歌集』の向こうを張る新企画として中宮定子から託された作品というわけである。

⑶　読み解きのカギ

筆者は、山本の導いた上記見解から、次の二点に注目し読み解きの道標としたい。

① 『枕草子』は中宮定子に捧げられた作品。

② 『枕草子』は『古今和歌集』の向こうを張る革新の意気込みをもった作品。

そのうえで、ランダムに配置された雑纂形態の『枕草子』を読み解くカギとして、関連章段を結び付ける「季語」の存在に注目したい。理由は、『枕草子』が『古今和歌集』の向こうを張る革新の意気込みをもった作品でありつつも、『古今和歌集』へのオマージュを含むとすれば、『古今和歌集』に通じる要素が潜んでいるはずである。実際に「季語」は『枕草子』に散見されるうえ、真の革新とは揺るぎ無い基盤の上に成立するものであるとすれば、「季語」はその有力候補だからである。

この仮説を確かめるため、次章では有名な

【参考】「仮名序」と「春はあけぼの」

『古今和歌集』「仮名序」抜粋

かかるに、今すべらぎの（中略）『万葉集』に入らぬ古き歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなむ。

それがなかに、梅を挿頭すよりはじめて、郭公を聞き、紅葉を折り、雪を見るにいたるまで、また、鶴亀につけて君を思ひ、人をも祝ひ、秋萩・夏草を見てつまを恋ひ、逢坂山にいたりて手向を祈り、あるは、春夏秋冬にも入らぬくさぐさの歌をなむ撰ばせ給ひける。すべて千歌二十巻、名づけて『古今和歌集』といふ。

（現代語訳）この時に際し、今上陛下が（中略）『万葉集』に入らぬ古歌と私ども自身の歌とを提出せさせたもうたのであります。

それらの歌の中から、梅を頭に挿して遊ぶ時に始り、ほととぎすを聞く時、紅葉を見に行く時、雪を眺める時までの歌、また鶴亀に託して主君の身を思い、人の長寿を祝う歌、秋萩や夏草を見て恋人を思う歌、逢坂山まで来て手向けの神に旅の安全を祈る歌、さては春夏秋冬の中にも入らない雑の歌などを分類して、その編集を私どもにおさせになりました。総数は一千首で二十巻、名づけて『古今和歌集』と申します。

『古今和歌集』新編日本古典文学全集より

『枕草子』初段「春はあけぼの」

春はあけぼの。やうやうしろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、蛍のおほく飛びちがいたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は夕暮。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、烏のねどころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛びいそぐさへあはれなり。まして雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭持てわたるも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も、白き灰がちになりてわろし。

下線部は筆者による（以下同じ）。

「香炉峰の雪」のエピソードを軸に冬の季語である「雪」で関連章段に横串を入れてみる。

そして、次々章（後編）では、同じ方法論により本題である「『枕草子』の田植えと歌」を夏の季語「ホトトギス」で読み解いていく。

３．「香炉峰の雪」を例に

⑴　「香炉峰の雪」のエピソード

このエピソードは、章段番号からも分かるように、思いのほか後ろの方に配置されている。

第二百八十段「雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて」

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火をおこして、物語などしてあつまりさぶらふに、「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。人々も「さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。なほこの宮の人にはさべきなめり」と言ふ。

（現代語訳）雪がたいへん深く降り積もっているのを、いつものようでもなく御格子をお下ろししたままで、炭櫃に火をおこして、わたしたち女房が話などをして集って伺候していると、中宮様が「少納言よ。香炉峰の雪はどんなであろう」と仰せになるので、女官に御格子を上げさせて、御簾を高く巻き上げたところ、お笑いあそばす。他の人たちも「その詩句は知っており、歌などにまでも詠み込むのだけれど、思いつきもしませんでした。やはり、この宮にお仕えする人としては、そうあるべきなのでしょう」と言う。

＊「香炉峰の雪」は、『白氏文集』「香炉峰下に新たに山居を卜して草堂初めて成り、偶東の壁に題する五首」のうち四首目からの引用。「遺愛寺ノ鐘ハ枕ヲ欹テテ聴キ、香炉峰ノ雪ハ簾ヲ撥ゲテ看ル」。『和漢朗詠集』にも所載。

中宮定子の後宮に宮仕えする女房ならば、『白氏文集』程度は当然の教養であり、それ以上の機知を楽しむ精神を誇りにしていることを印象づけるエピソードである。

ただ、この章段だけを読む限りは、多少嫌味な印象を禁じ得ない。

⑵　雪の章段

「雪」で横串を入れる一連の章段を本稿では、まとめて「雪の章段」と呼ぶことにする。「香炉峰の雪」の第二百八十段を含め、雪の章段はおよそ十章余り。そのほとんどは、「香炉峰の雪」よりも前に配置されているので、遡って順に見ていくことにする。

①　雪の章段「序」

初段「春はあけぼの」には、「冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず」とある。前出の山本の指摘通り、「冬はつとめて（早朝）」と時間帯をあげている。これに続く一文で、早朝に降る雪への格別の思いが綴られている。

②　にげなきもの

第四十三段「にげなきもの」（似つかわしくないもの）では、「にげなきもの　下衆の家に雪の降りたる。また、月のさし入りたるもくちをし。」つまり、身分の低い者の家に雪が降るのは似つかわしくない。月が差し込んでいるのももったいないというわけである。

ここでも雪は格別なものであり、似つかわしくない例をあげることで、「雪は高貴なもの」と位置付けているのだろう。

③　雪で賭けをする二人

第八十三段「職の御曹司におはしますころ、西の廂に」では、雪で賭けをする中宮定子と清少納言の親密ぶりが描かれている。「香炉峰の雪」の印象とは違って、取り澄まさない『枕草子』の一面が表れているので、少し長くなるが、あらすじを紹介する。

中宮定子が「職の御曹司」を住まいとしていた十二月十日余りのころ、「西の廂の間」で

行われたのは十数人の僧侶が交代で行う不断の読経だった。この章段には、定子後宮の女房たちからいつしか「常陸の介」とあだ名で呼ばれる偽の尼僧（実は物乞い）が、妙な歌を口ずさみながら間の悪いタイミングで庭先に現れては、僧侶や女房たちを困らせるコメディが同時進行する。

大雪が降ってきたので女房たちが雪で遊びだすと、遊びはエスカレートして庭に雪山を作ることになる。中宮様の思召しだと言って侍たちまで動員し、大きな雪山が出来上がる。中宮定子が「この山はいつまであるだろうか」と問うと、女房たちは、「十日余りはあるでしょう」と口々に言う。清少納言も問われて、「正月の十日過ぎまではきっとございましょう」と三倍の期間で答えるが、「そんなにはありえまい」とする中宮定子と言い争うかたちになる。同僚の女房たちも「年内、月末までも保つまい」という。ここから互いに一歩も引かない清少納言と中宮定子の雪はいつまで残るかをめぐる賭けが始まる。

十二月二十日ころに雨が降ると、どうか消えないでと清少納言は祈る。月末には少し小さくなっても雪山は残っている。常陸の介が雪山に登りハラハラさせられる。正月になって、また大雪が降り清少納言が喜んでいると、中宮定子は「それでは筋が立たない。初めの部分は残して、新しく積もった部分ははき捨てよ」と命じ、新雪分は除去されてしまう。

それでも雪山は残っていたので、清少納言は勝利を確信していた。しかし、女房たちは「七日をさえも過ごせまい」という。中宮定子が急に正月三日から内裏に入られるというので清少納言はお供をし、十五日までは雪山が子供たちに踏み散らかされないよう庭木番に見張りを命じた。七日までお供をし、以降は実家に戻り、雪に添える和歌を懸命に準備していた。十日ころ、使いを出して雪山の様子を確認させ、「十五日までは保つくらいはあります」との報告に安堵していた。

ところが、十四日夜に酷く雨が降ったので、気が気でない清少納言は、暗いうちに起きて、雪のきれいなところを持ってくるよう使いを出すが、戻った使いから、「雪はすっかり無くなっていました」と報告を受け呆然とする。

落ち込みながら二十日に参内した際、一部始終を申し上げると、中宮定子は大笑いされ「こんなに心に入れて思っていることを、無にしたのだから、きっと今わたしは仏罰を受けているだろう。本当は、四日の夜、侍たちを行かせて捨てさせたのだよ」と庭木番等との口裏合わせなども明かし、「量も多かったというから、本当に二十日（今日）までも保ちおおせたであろう。その歌を話しなさい。賭けはそなたの勝ちと同じだ。」と慰める。

これに清少納言は、「どうして、こんな情けないお話を承って、歌を申せましょう」と泣きそうに答える。あとから降ってきた雪をうれしいと思っていたのに、「それは筋が違うと、かき捨ててしまいなさいと」これまでの仕打ちに悔しさを滲ませる。その一部始終を聞いた帝は、二人の間を取り持とうと清少納言をなだめる。

賭けに勝利し、雪に和歌を添えて奉るという清少納言の目論見は、まさかのパワハラ的ドッキリで粉砕されてしまう。

解釈によっては、中宮定子は負けを回避したのではなく、清少納言が出すぎた女として同僚たちから阻害されないための配慮だったとも読める。だとすれば、笑い話の中に潜ませた中宮定子の男前な優しさを示すエピソードでもある。

この章段の清少納言は、常陸の介を超える道化役であり、中宮定子とは敬語で言い争えるほど親密である。

④　正月に寺に籠りたるは

第百十六段「正月に寺に籠りたるは」の主な内容は、寺に参詣してお籠り（宿泊）した際の僧侶たちの様子や会話などを興味深く観察したものである。もちろん、天候は雪。

⑤　雪のいと高うはあらで

第百七十四段「雪のいと高うはあらで」では、雪がうっすらと降った時のあれこれを綴っている。

⑥　村上の先帝の御時に

第百七十五段「村上の先帝の御時に」では、村上天皇（一条天皇の祖父）の雪のエピソードが紹介されている。

村上帝は、雪がたいへん深く降った折、雪を盛った食器に梅の花を挿して、月がたいへん明るい時に、「これについて歌を詠みなさい」と蔵人に下命された。すると、「雪月花の時」と奏上したのを、帝は非常に御賞賛され、「こういう場合、歌など詠むのは、世間ありきたりなことだ。こんなふうに、その時にぴったりなことは、なかなか言えないものだ」と仰せになった。

ありきたりではない機知を是とする村上帝の態度は、「香炉峰の雪」のエピソードのお手本のようでもあり、伏線のようでもある。

＊「雪月花の時」は、『白氏文集』（殷協律に寄す）からの引用。「琴詩酒ノ伴皆我ヲ抛ツ、雪月花ノ時最モ君ヲ憶フ」。風流を愛する旧友を思う詩。『和漢朗詠集』にも所載。蔵人の意図は、最も憶う君＝風流を愛する友＝村上帝。

⑦　エピソード零

第百七十七段「宮にはじめてまゐりたるころ」では、清少納言の人生初の宮仕えと中宮定子との出会いが描かれている。言わば「エピソード零」にあたる章段である。

初出仕時の清少納言の年齢について、前出の永井は『枕草子』（新編日本古典文学全集）の解説で、「正歴四年初出仕説に従えば」と前置きして二十八歳前後、中宮定子は約十歳年下と推定している。清少納言には、すでに婚姻歴も出産歴もあったようだ。父は『後撰和歌集』の撰者の一人である清原元輔。曾祖父は『古今和歌集』に数十首撰ばれている清原深養父。二人とも和歌に通じた教養人であり、国司として地方長官を務めた貴族の端くれだった。清少納言の「清」は、そうした父方の氏に由来する。出仕経緯は未詳だが、能力を見込まれてというのが大方の見方である。

冒頭の一文は、初出仕当時の清少納言の心情を表している。

第百七十七段「宮にはじめてまゐりたるころ」

宮にはじめてまゐりたるころ、物のはづかしき事の数知らず、涙も落ちぬべければ、夜々まゐりて、三尺の御几帳のうしろに候ふに、絵など取り出でて見せさせたまふを、手にてもえさし出づまじうわりなし。

（現代語訳）中宮様の御殿にはじめて参上したころ、何かと恥ずかしいことが数知らずあって、涙も落ちてしまいそうなので、毎日、夜出仕して、中宮様のおそばの三尺の御几帳の後ろにひかえていると、中宮様は絵などをお取り出しになってお見せあそばしてくださるのを、それに手でさえも出せそうにもなく、わたしはむやみと困惑した気持ちでいる。

意外にも清少納言は、気後れと人見知りから、泣きそうな日々を送っていた。住居は他の女房たちと同様に住み込みである。

この章段は、自身の殻に閉じこもる清少納言が徐々にその殻を破って覚醒する一種の誕生秘話である。少し長くなるが、あらすじを区切って紹介する。

（目前の定子を発見する）

顔を伏せてばかりいた清少納言は、中宮定子の袖先からのぞく薄紅梅色をした手を目にし、「こうした方が、世の中にはいらっしゃったのだ」とハッとした気持ちで見つめた。

（格子を高く上げて見た暁の雪景色）

暁（あかつき）までに自分の部屋に戻ることばかり考えていた清少納言に中宮定子は「いくら葛城（かずらぎ）の神だからといっても、もうしばらくいなさい」と引き留める。葛城の神とは、醜貌をはばかって夜しか現れない神様のことで、中宮定子は清少納言のコンプレックスを察していた。

朝方に掃除係の女官が部屋の格子を上げようとするが、中宮定子は清少納言をおもんばかり、「いけない」と制止する。中宮定子の質問やお話を聞いて過ごすうちに、「自分の部屋に下がりたくなっただろう。夜になったらまた来るように」と戻ることを許される。

自分の部屋に戻るやいなや格子をさっと上げたところ雪が降っていた。その早朝の光景を清少納言は、「雪、いとをかし（雪はとても趣がある）」と眺めた。

（先輩に引きこもりを叱られる）

昼ごろに、「今日はやはり参上せよ。雪空で曇ってまるみえでもあるまいから」と中宮定子からたびたびのお召しがかかる。

先輩女房から、「引きこもっているのは見苦しい」と叱られ、「中宮様に思いがあるのでしょう。人の好意にそむくのはにくらしいことですよ」と急（せ）き立てられる。

（同僚の姿が見えてくる）

無我夢中で出仕したものの、清少納言は相変わらず気重だった。ところが、少しずつ周囲の様子が見えはじめていた。

中宮定子は蒔絵（まきえ）の施された火桶のそばにいらっしゃって、上席の女房が身の回りの世話をしていた。先輩の女房たちがテキパキと事務をこなし、気おくれした様子もなく、おしゃべりをし、にこにこ笑うのを羨望の目で眺めながら、「いつになったら、あんなふうに宮仕えの仲間に入れるだろうか」と感じていた。

（不意の来客に翻弄されて思う同僚の初心）

「雪見舞い」と称して、中宮定子の兄藤原伊周（これちか）が現れる。伊周は、父道隆の引き立てにより二十代前半で、大納言に昇進していた。女房たちが部屋を片付けるなか、清少納言は自分の部屋に帰りたいと思いながら御几帳の後ろに隠れた。以前、牛車同士ですれ違う際に見かけた人だったが、その時も牛車の簾（すだれ）を下ろして自分の顔を隠していた。

ただ、この日の清少納言の観察眼は、伊周の装束の紫色が雪に映えて「いみじうをかし（非常におもしろい）」と称賛した。中宮定子は白を幾重にも重ねた上に紅（くれない）の唐綾（からあや）を羽織っていた。この兄妹の姿に、絵の中の世界が現実にあったのだと感動する。

御几帳の後ろに隠れている清少納言を見つけて傍にやってきた伊周は、巧みな言葉の綾で翻弄してくる。見かねて中宮定子が助け舟を出すのだが、伊周は「この人がわたしをつかまえて立たせてくれないのです」などと言って、清少納言をうろたえさせた。

そんな伊周と同僚の女房たちが少しも恥ずかしがらずに冗談や反論を気さくに交わすのを見て、清少納言はとても人間業ではないと思いながら顔を赤くしていた。

その後の来客にも女房たちは、如才なく応対をしていた。それを見ながら清少納言は、「この人たちも初めて自分の家を出たころは、不慣れであっただろう。宮仕えの間に慣れたに違いない。」と同僚の初心を想像した。

（私を好きかと問われて）

中宮定子は会話のついでに「わたしを思うか（好きか）」と切り出す。「どうしてお思い申しあげないことがございましょう」と答える清少納言だったが、女官の詰所の方で誰かがくしゃみをする。すると中宮定子は「ああ、いやなこと。いいかげんなこと言ったのね。まあいいから」と奥へと入ってしまわれた。

清少納言は内心、これほど思っているのに、くしゃみの方が嘘なのだ、くしゃみくらい我慢してくれてもよいではないかと悶々とし、うまく弁明できないまま夜が明けた。

（中宮定子の手紙と清少納言の返信）

自分の部屋に戻ると、薄緑色の美しい手紙が届けられた。中宮定子の歌が書かれていた。

「いかにしていかに知らましいつわりを空にただすの神なかりせば」

（どういう方法によって、そなたのそら言をどう知っただろうか、知ることはできなかったろうに、もし天にあって偽りを証拠なしに判断する糺の神がいらっしゃらないのだったら）

清少納言は、すばらしいとも、くやしいとも心乱れながら、昨日くしゃみをした人をいまいましいと思いつつ返事を書いた。

「薄さ濃さそれにもよらぬはなゆゑに憂き身のほどを見るぞわびしき」

（花なら、色の薄さ濃さ、そうしたことに美しさはよるでしょうが、これは「花」ならぬ「鼻」なのですから、中宮様をお思い申しあげる心の薄さ、濃さ、そうしたことに、くしゃみは左右されません。それなのにそのくしゃみゆえに、つらい身となってしまっている私の立場を知るのは、気がめいることでございます）

これに、「なほこればかり啓しなほさせたまへ（やはりこの程度は、よろしく御訂正の上、申しあげあそばしてくださいまし）」と添えて差し出した。

清少納言が「花と鼻」を掛けたコミカルな歌を返したのは、中宮定子が「空とそら言」を掛けたからに違いない。一方通行だった中宮定子とのコミュニケーションは、双方向の阿吽の域に達した。

ところで、早朝に自分の部屋の格子を高く上げて見た暁の雪景色は、初段の「冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず」を連想させる。人生の再スタートともいうべき緊張連続の宮仕えで、ほっとする瞬間に見た雪景色は格別な記憶であったに違いない。また、筆者は「高炉峰の雪」のエピソードで中宮定子が笑った理由を、このころの記憶と重ねた思い出し笑いではないかと想像したい。

⑧　雪高う降りて、今もなほ降るに

第二百三十段「雪高う降りて、今もなほ降るに」は、雪が深く降り積もって、今なお降る時に、若々しい下位高官でも色分けされた装束が、雪の白さに冴え映えてきれいだという。映えた色はといえば、紫色、紅、山吹色。

⑨　降るものは

第二百三十三段「降るものは」の、降るものとは、もちろん雪である。

第二百三十三段「降るものは」

降るものは　雪。霰。霙は、にくけれど、白き雪のまじりて降るをかし。

雪は、檜皮葺、いとめでたし。すこし消えがたになりたるほど。また、いとおほうも降らぬが、瓦の目ごとに入りて、黒うまろに見えたる、いとをかし。

時雨、霰は板屋。霜も板屋、庭。

（現代語訳）降るものとしては、雪。あられ。みぞれは気に入らないけれど、白い雪が混じって降るのはおもしろい。

雪は、檜皮葺に降るのが、とてもすばらしい。少し消えそうになっているところがよい。またそれほど多くも降らない雪が、瓦の目ごとに入って、黒く丸く見えているのは、とてもおもしろい。

時雨、あられは、板屋に降るの。霜も板屋や庭がよい。

雪の白さと組み合わされるのは、檜皮葺や瓦葺きの屋根の灰色。しかも少し雪が消えかかる微妙なモノトーン。ワビ・サビの美学。

⑩　雪の章段「結」

雪の章段の最後となる第二百八十三段「十二月二十四日、宮の御仏名の」では、中宮定子の存在を匂わせながら、中宮定子本人は一度も現れない。冒頭の一文は、次の通り。

第二百八十三段「十二月二十四日、宮の御仏名の」
十二月二十四日、宮の御仏名の半夜の導師聞きて出づる人は、夜中ばかりも過ぎにけむかし。

（現代語訳）十二月二十四日、中宮様の御仏名の半夜の導師の読経を聞いて出てくる人は、ま夜中もきっと過ぎてしまったことだろう。

当時、罪障消滅を祈る仏事は生前にも行われた。『枕草子』（新編日本古典文学全集）の校訂者である松尾聰は、通例十二月十九日から三夜連続で行われ、これは二十二日から行われた三夜目かと注釈をつけている。

ちなみに、第七十七段「御仏名のまたの日」（御仏名の日の翌日）では、帝が中宮定子に見せるため持ってこさせた地獄絵の屏風を、清少納言は中宮定子から見せられるが、恐ろしくて絶対に見なかったというエピソードがある。

だから、この章段に中宮定子は現れなくても存在は匂わされているのである。また、冒頭の一文は、「けむかし」と推量で終わるので、後宮を出る人々を見送る場に清少納言は立ち会っていないことになる。清少納言が、どこにいるのか未詳だが、先に進むことにする。

さて、これに続く文には、これまで見てきた「雪の章段」の関連がいくつか見つかる。

一つ目は、②第四十三段「にげなきもの」（似つかわしくないもの）との関係である。「身分の低い者の家に雪が降るのは似つかわしくない」と書いた清少納言は、裏腹の事を書いている。該当箇所は下線の通り。

日ごろ降りつる雪の、今日はやみて、風などいたう吹きつれば、垂氷いみじうしだり、地などこそ、むらむら白き所がちなれ、屋の上はただおしなべて白きに、あやしき賤の屋も雪にみな面隠しして、有明の月の隈なきに、いみじうをかし。白銀などを葺きたるやうなるに、水晶の滝など言はましやうにて、長く短く、ことさらにかけわたしたると見えて、言ふにもあまりてめでたきに、

（現代語訳）何日も降りつづいた雪が、今日はやんで、風などがひどく吹いたので、つららが長く垂れさがっていて、土などは、まだらに白い所が多いけれど、建物の上はただずっと一面に白い所に、いやしい賤の屋も雪でみな表面を隠していて、有明の月が、行き届かぬかげもなく輝いているので、たいへんおもしろい。屋根の上はまるで白銀などを葺いてあるような美しさなのに、水晶の滝などとでも言いたいようなふうに、あるいは長く、あるいは短く、つららをわざわざ掛けわたしてあるように見えて、言うのにも言葉が足りないほどのすばらしさのうちに、

賤しき家に降る雪も美しいと感じたこちらが本心だとすれば、②第四十三段「にげなきもの」で、殊更に「身分の低い者の家に雪が降るのは似つかわしくない」としたのはなぜだろうか。筆者は、清少納言に賤しき者への悪意や害意はなく、雪を格別高貴なものと位置付けるための強調に過ぎないと解したい。というのも、実は清少納言は庶民的だからである。その点は、次回後編で紹介する。

続く文中にも、これまで見てきた「雪の章段」の関連が見つかる。

二つ目は、「簾を高々と上げる行為」である。これは、「香炉峰の雪」のエピソードで清少納言が簾を高く巻き上げた行為に通じ、また、⑦第百七十七段「宮にはじめてまゐりたるころ」で、清少納言が自分の部屋の格子をさっと上げた行為に通じる。該当箇所は二重下線の通り。

三つ目は、「雪に映える殿方の装束の色」である。これは、⑦第百七十七段「宮にはじめてまゐりたるころ」で現れる藤原伊周の装束の紫色に通じ、⑧第二百三十段「雪高う降りて、今もなほ降るに」で、雪の白さに映えてきれいだと書いた若い高官の装束。紫色、紅、山吹色に通じる。該当箇所は下線のとおり。

下簾もかけぬ車の、簾をいと高う上げたれば、奥までさし入りたる月に、薄色、白き、紅梅など、七つ八つばかり着たる上に、濃き衣のいとあざやかなるつやなど、月に映えてをかしう見ゆるかたはらに、葡萄染の固紋の指貫、白き衣どもあまた、山吹、紅など着こぼして、直衣のいと白き紐を解きたれば、ぬぎ垂れられていみじうこぼれ出でたり。

（現代語訳）下簾も掛けない車の、簾を高々と上げてあるので、車の奥までさし込んでいる月に、薄紫、白いもの、紅梅など、七、八枚ばかり着ている上に、濃い紫の表着のとても鮮やかな光沢などが、月に映えておもしろく見えるそのかたわらに、葡萄染の固紋の指貫に、白い単衣をたくさん重ね、山吹色や紅の衣などを外にこぼれて見えるように着て、直衣の、とても白い紐を解いてあるので、直衣がはだけて、肩の下に垂れて、ひどく車からその端がこぼれ出ている。

この後は、初出仕時の内気な清少納言からは想像できない前衛的な内容が続く。

指貫の片つ方はとじきみのもとに踏み出だしたるなど、道に人会ひたらば、をかしと見つべし。月の影のはしたなさに、うしろざまにすべり入るを、常に引き寄せ、あらはになされてわぶるもをかし。「凛々として氷鋪けり」といふことを、かへすがへす誦しておはするは、いみじうをかしうて、夜一夜もありかまほしきに、行く所の近うなるも、くちをし。

（現代語訳）指貫の片一方は、とじきみのところに踏み出しているかっこうなど、道で、人が出会ったら、おもしろいときっと見ることだろう。女は月の明るい光がきまり悪くて、奥の方へすべり込んで隠れるのを、男が何度もそばに引き寄せ、まる見えにされて女がつらがるのも、おもしろい。「凛々として氷鋪けり」という詩を、幾度も誦んじておいでになるのは、とてもおもしろくて、一晩中でもこうして乗ってまわりたいのに、目的の所が近くなるのは、残念なことだ。

＊「凛々として氷鋪けり」は、『和漢朗詠集』（十五夜の句）からの引用。「秦甸ノ一千余里　凛々トシテ氷鋪ケリ」。本来は秋の詩。大意は、長安の都が名月に照らされて氷が敷きつめられたように美しい。

牛車の主は、正装をラフに着崩して、簾を高く巻き上げた車に彼女を乗せ、その肩を引き寄せ、漢詩をもじった粋な歌を繰り返している。それを清少納言はおもしろいという。

現代に引き直せば、運転手付きオープンカーでの夜のドライブであり、ちょい悪紳士が同乗の彼女を口説いているようなものだろう。

清少納言は、中宮定子の御仏名の夜に、なぜこうした夜のドライブを書いたのだろうか。筆者は、これまで見てきた「雪の章段」の関連の四つ目がここにあると考える。⑥第百七十五段「村上の先帝の御時に」で打ち出された「ありきたりではない機知を是とする態度」である。清少納言は、雪の章段を結ぶにあたり、雪にまつわる「いみじうをかし」の極みを最後に置いたのではないだろうか。

(3)　「雪の章段」を通して

「雪」をキーワードに関連章段をつないでみたが、いくつかのことに気づかされる。

濃淡はあるにせよ、やはり「雪の章段」は相互に関連性をもっていること。清少納言は、「雪」の歌をただの一首も披露していないこと。その代わり、到底三十一文字に収まらない多彩で自由な表現がほとばしっていること。そして、それらは、最終的には読者である中宮定子への思いに収斂すること、である。

こうした点は、夏の季語「ホトトギス」で読み解く後編にも共通する。

【参考資料】

・松尾聰・永井和子『枕草子』（新編日本古典文学全集・小学館・1997年）（三巻本系）
・山本淳子『枕草子のたくらみ』（朝日新聞出版・2017）
・松尾聰・永井和子『枕草子』（日本古典文学全集・小学館・1974年）（能因本系）
・永井和子『幻想の平安文学』（笠間書院・2018年）
・小沢正夫・松田成穂『古今和歌集』（新編日本古典文学全集・小学館・1994年）
・菅野禮行『和漢朗詠集』（新編日本古典文学全集・小学館・1999年）